

発表日	平成 30 年 10 月 31 日 (水)	発表形式	ポスター展示
所属・氏名	環境科学研究所 川村 顕子		
発表名称	市民協働（小学生）による生物調査 「こども『いきいき』生き物調査」 結果報告		
ジャンル	環境研究	部門	事業事例

1 はじめに

環境科学研究所（以下、研究所）では、地域の自然や生き物への関心を高めてもらうとともに、生物多様性保全に資する基礎データを得ることを目的として、市立小学校（2017年5月現在 全341校）と連携し「こども『いきいき』生き物調査」を実施している。2013年に調査を開始して以降毎年実施し、2017年には5回目を迎えた。

今回、2017年までの調査結果の一部を報告する。

2 調査方法

調査票を、小学5年生（2017年5月現在 全30,504人）に配布し、夏休み明けに回収した。調査票は、調査対象として設定した9種類の生物について、過去1年間に、家や学校の近く（学区内）で姿を見たり、鳴き声を聞いたものについて、季節ごとに○をつけてもらう形式である。

研究所では、回収した調査票から結果を集計し、学校ごとの回答者数とその生物の確認者数から確認率を求めた。そして、小学校の位置情報と確認率を合わせ、市内全域における空間補間（GISクリギング法）を行い、確認率の高低を色の濃淡で図示した。それらの結果を基に考察を行い、報告書にまとめた。



図1 2017年調査票（左：表面、右：裏面）

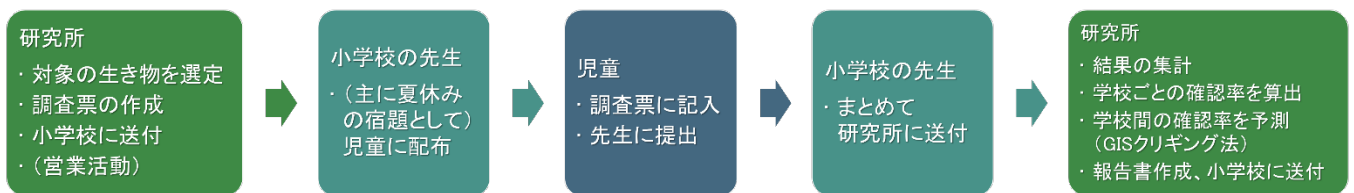


図2 調査の流れ

3 調査結果

2017 年までの 5 年間で、35 種類の生物について調査を行い、毎年 150 校以上（44～55%）の小学校、1 万人以上の児童から回答を得ている。2017 年は 189 校、13,095 人から回答を得た。

以下の 5 年間の調査結果の一部を示す。

(1) ヘビのなかま

「ヘビのなかま」は 2013 年及び 2017 年に調査対象として設定した。

全体の確認率は 2013 年と 2017 年で同じ 37% となり、また多摩・三浦丘陵にあたる丘陵部で確認率が高いというパターンも類似していた。4 年間で分布状況の違いはほとんど見られなかった。

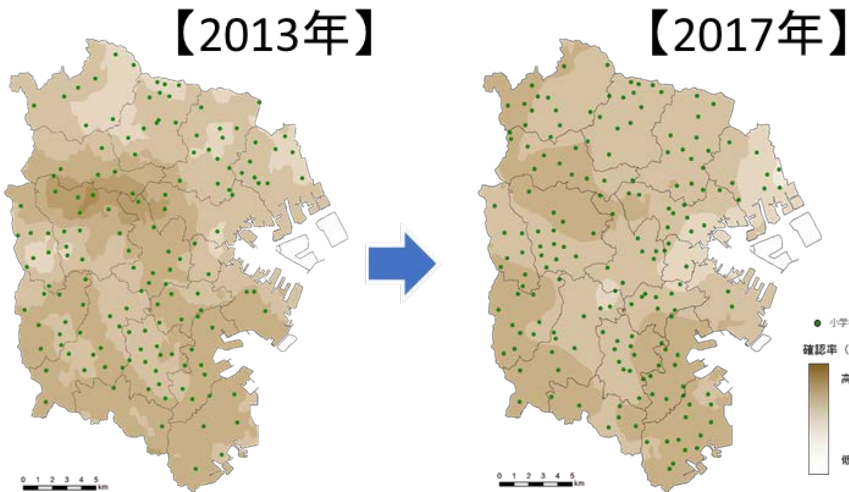


図3 「ヘビのなかま」調査結果の経年変化

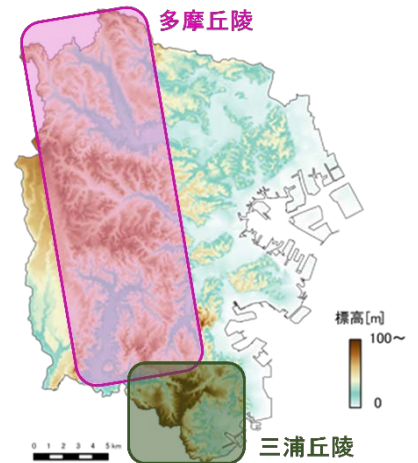


図4 横浜の標高

(2) アオスジアゲハ

「アオスジアゲハ」は 2017 年に初めて調査対象として設定した。

緑の 10 大拠点等のまとまった緑地が市内西側に集中しているため、多くの対象生物に西側での確認率が高い傾向が見られたなか、「アオスジアゲハ」の確認率は東側の臨海都市部で高かった。町なかに街路樹として植栽されることも多いクスノキやタブノキが幼虫の食草であり、これらに産卵することが原因と考えられる。都市部においては最もよく見られるチョウの一種である。

全体の確認率は 63% であった。

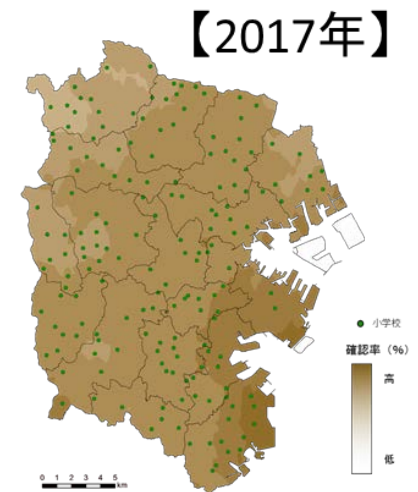


図5 「アオスジアゲハ」調査結果

4 今後の予定

各年の調査結果報告書および結果概要は、研究所 Web ページにおいて公開するとともに、全小学校に配布している。2018 年も実施し、現在は結果の取りまとめを行っている。

本調査は、対象生物の選定、組合せ等を工夫することにより、効率的かつ広域的な生物調査の手段になり得ると考えられ、市民科学を活用した取組みとして今後も継続して実施する予定である。

【こども「いきいき」生き物調査 Web ページ】

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kankyo/mamoru/kenkyu/data/forest/ikiiki.html>

【共同研究者】環境科学研究所 七里 浩志、堀 美智子、潮田 健太郎、中里 亜利咲